

奥多摩のせし



# 奥多摩

《第2号》

平成18年7月15日

奥多摩観光協会



## ～季節だより～

8月の奥多摩は、各地で郷土色豊かな伝統芸能の獅子舞が行われます。獅子は、雄獅子2匹と雌獅子1匹のいわゆる「三匹獅子」で、四方に花笠をかぶったささらすり立つので「ささら獅子」とも呼ばれます。3匹の獅子が激しく立ち回り、あるいは、華麗に舞い、縦横無尽に踊りまわる姿は圧巻です。地元では、獅子を踊るとは言わず狂うと表現するほどの激しい動きを伴います。

獅子舞を奉納する本来の目的は、地域の安寧と住民の幸福を願うものですが、雌獅子をめぐる駆け引きや争いがあったり、仲良く踊ったりで、まさに人間社会そのものです。一般的には、四隅に竹で作ったささらを奏でる人が4人立ち、そこに神庭が設定されます。4人の意味は中国伝来の四神（青龍・白虎・朱雀・玄武）を意味しているものと思われませんが、地域によっては、6人の所もあり、地域性や、伝播の関係が分かります。

ところで、あなたは獅子頭を見ただけで雄獅子、

雌獅子を見分けられますか。獅子の角や歯に注目してみてください。例えば、歯は、金色の歯もあれば、真っ黒い歯もあります。その昔、既婚の女性は歯を黒く染める習慣がありました。ちなみに、雌獅子の中にはお歯黒の獅子もいます。獅子頭に限らず獅子の持ち物や花笠など、それぞれに工夫があり興味深く見ることができます。

獅子舞は、ただ見ているだけでは、なかなか内容が分かりません。最近、事前に解説が入るようになりましたが、いちばん手っ取り早いのは、近くで見ている土地っ子に声をかけることです。人と人とのつながりは楽しい会話が基本です。獅子舞の話はもちろんのこと、奥多摩のこと、多摩川のこと、今話題の鹿や猪の話でもいいじゃないですか。地元の人との会話を楽しんでみてください。

8月の日曜日、どこかでお目にかかるのを楽しみにしています。

8月6日(日) 海沢神社(海沢)	13日(日) 奥氷川神社(氷川)	16日(日) 白髭神社(境)
20日(日) 熊野神社(鳩ノ巣)	元栖神社(白丸)	
27日(日) 山祇神社(小留浦)	根元神社(栃久保)	青木神社(大丹波)
9月3日(日) 一石山神社(日原)	10日(日) 小河内神社(川野、坂本、原ほか)	

## ～ 来 せ っ せ え ～

### 夏休みカジカ探し

行 先：海沢

開催日：8月15、16日（火、水）

梅雨があけ、ギラギラと照りつける夏の太陽、こんな日は何よりも水辺が恋しくなります。

渓流では、この頃になるとサビを落としたヤマメ、イワナたちの活動が一層活発となり、釣り人と渓流魚のかけ引きが秋口まで続きます。

渓流魚とは、アユ、渓流の女王ヤマメ、水の妖精と呼ばれるイワナのみと思いいこんでいる人が案外多いようです。しかし、どっこい忘れてはならないのがカジカです。姿こそ不格好でグロテスクですが、カジカもまた立派な渓流魚です。

年輩のお父さん達にとって、幼き頃の箱メガネを使ったカジカ捕りは、晩メシのおかずを調達する唯一の手段であったことは言うまでもありません。また、山村に暮らす人々にとっては、ヤマメ、イワナと同様に貴重な動物性タンパク源であり、焼き干しにしたカジカは、冬の保存食でもありました。

カジカ（鮠）とは、カサゴ目カジカ科の総称で、

日本には、カマキリ（アコカケ）、ヤマノカミ等々、90種近くが棲息しています。海にしか棲息できないもの（ハゼなど）、産卵の時、海に下り、産卵後川に戻る回遊性のあるもの（カマキリなど）、そして、陸封型で水のきれいな河川の冷水域にしか棲息できないものがあります。

我々が、カジカと呼んでいるのは、この陸封型ですが、扁平、ずんぐりした体型で、頭、口が大きく、灰褐色で暗色のまだら模様があり、大きなものは15センチぐらいまでになります。

子ども達にとって親しかったカジカも、今はめったに見かけることができない絶滅危惧種になりつつあります。乱獲のせいなのか、環境の変化による水質汚染のせいなのか、とにかく我々にとって一番身近で思い出深いカジカが姿を消しつつあることは確かです。

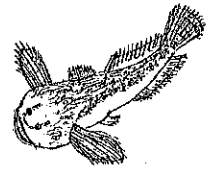
カジカは、その特異な姿ゆえなのか、養殖の採算性のためなのか、本格的な

養殖の対象にされず、

このまま姿を

消していくの

でしょうか。



## ～ 行 っ て き た め よ ～

### 妙琴蟬を訪ねる倉戸山

奥多摩湖のバックにそびえ立つ倉戸山は、標高1169.3mの奥多摩ではポピュラーな美しい姿の山です。登山口は、名湯で知られる鶴の湯温泉給湯所がある「女の湯バス停」そばのトンネルの脇にあります。

一本調子の急登にとりついて、標高850m近く登ると、カジカガエルのコーラスに似たハルゼミが鳴き、「ミョーキン・ミョーキン」と鳴くエゾハルゼミが加わり、絶妙なハーモニーを奏でて、訪れる人を癒して感動させてくれるのがこの山の魅力なのです。

このエゾハルゼミは、標高800～1000mの山で落葉広葉樹を好み、特に晴れた日に良く鳴く特徴を持っています。奥多摩の山を愛する粋人が、いつしかその鳴き声から、「妙琴蟬」と親しみをこめて呼んだのです。

登り始めてから2時間15分位でゆったりとし

た広場の頂上に立ちます。これまでの疲れを癒すには絶好の場所です。

下山コースは、初夏の緑が映える美しいハクウンボクの真っ白な長い花房と、エゴノキは、白い花を下向きに垂らし可憐に咲いているのが目にとまります。

更に落ち葉の感触のトレイルを楽しみながら歩みを進めると、地面にグルグル巻きの葉が沢山落ちていたのをウオッチングすることができます。これは、1センチにも満たない甲虫のオトシブミが卵を産み付けるため、木の葉を巻いて作った幼虫のゆりかごです。

しばらくの間、長い尾根道を下って人工林に入り、見え隠れするエメラルド色の奥多摩湖を見ながら、温泉神社まで一気に降り、大妻代園地に向かう分岐を過ぎ、最終ゴールに至るルートです。

蝉時雨と森林セラピーで癒されるロマンのある一度は訪れたい初夏の倉戸山です。

## ～奥多摩登山者～

### 奥多摩に出た山賊 2

午後3時ごろ、小柄な50歳ぐらいの登山者がひとりで小屋に入ってきて、前夜の宿泊はふたりのみであった。アバタ顔（皮フにぶつぶつと小さなくぼみがある）のその男は、あまり話もせず、小屋のストーブでお湯を沸かし、アルファ米の夕食をすませると、早々に寝てしまった。

今朝Tさんは午前4時ごろ起床し、朝食を作って食べていたら、男も起き出し、鉈で木の枝を切っていた。

朝食を終えたTさんは、川苔山を經由し古里に下りようと、午前6時、男に「お先に」と声をかけて小屋を出た。小屋の前の坂を下っていると、いきなり後頭部にゴツンという強い衝撃を受けた。後ろを振り返ろうとしたとき、また堅いもので頭を殴られた。ふたたび後ろを振り返ると、小屋に泊まった男が鉈を振り上げ、鉈のミネの方で頭を殴ってきた。必死でかわし、男の鉈を持っている手を両手で押さえたが、今度は拳で左目付近を何回も殴られた。

このままでは殺されると思ったTさんは「なんでだあ」と叫んで、鉈を持っている手を必死に押さえていると、男の力が緩み「四日食っていない」と言った。Tさんはとっさに金を渡せば助かるのじゃないかと思い、「金ならバッグにある」と言って、地面に落ちていたポシェットを拾い、中からビニール袋に入った1万9000円を渡すと、男はそれを奪い取り、一杯水避難小屋の方に無言でもどっていった。

Tさんは「助かった」と思い、蕎麦粒山方向に必死で逃げた。途中、一杯水の水場まで来て、鉈のミネで殴られた頭をタオルで拭くと、ベツリと血がついてきた。何回もタオルをすすぎ、頭や顔を拭きながら長い間そこで休んでいた。

Tさんは3時間ほどそうしていたが、古里に下るより日原に下りた方が早いと思い、恐る恐る一杯水避難小屋に引き返し、中を覗いたが男はいなかった。

Tさんは身体に脱力感を感じ、避難小屋に入り横になって休んでいた。そこへ夫婦連れの登山者が入ってきて何か話しかけてきたが、Tさんは気が動転していたのか「避難小屋に泊まりにきたんだ」などとわけの分からないことを言った。なぜ夫婦連れの登山者に助けを求めなかったのか、自分でも分からなかったという。

夫婦連れの登山者が一杯水避難小屋を出て行ってしばらくしてから、捜索に登ったT救助隊長などに発見され、救助されたというものであった。

登山者の敵であるこの山賊男を、なんとしても逮捕しなければ警察の不名誉であるばかりでなく、山岳救助隊としてのメンツが立たない。なによりも、好きで奥多摩を訪れる登山者が山に登れなくなる。

翌日から山岳救助隊員総出の山岳パトロールが始まった。青梅署刑事課では町での捜査にも着手した。そして何日かあと、刑事課員の執拗な臈(そう)品捜査のかいあって、Nさんが盗られたデジタルカメラが発見された。その中に残っていた画像が復元され、顔写真が手に入り、写っていた男の名前も割れた。その写真を被害者であるNさんとTさんに見せると、ふたりとも「この男に間違いなし」と証言したという。

男は住所不定、無職の「H」(55歳)で、以前は都内のO市に住んでいたという。被害者のNさんに本名を名乗っていたことになる。

刑事課ではHの逮捕状をとり、山岳救助隊は連日の山狩りとなった。とくに一杯水避難小屋と西谷山避難小屋には「夜討ち朝駆け」をかけ、そのために私も交番の2階に泊まり込んで、朝の3時に山へ出発することもあった。

駅やバス会社などにも顔写真を配り情報を求めた。早朝の駅ホームに張り込みもかけた。

夕方、山から下りてきたところに、バスの運転手からHに似た男を大丹波まで乗せたという情報が入り、すぐさまとって返し一杯水避難小屋まで登って行ったが空振りに終わった。

一週間もすると山岳救助隊員にも焦りが出てきた。Hにしたっていつも山に登っているわけではないだろうし、次もこの山とは限らない。そしてもう奥多摩には来ないかもしれない。しかし「あいつは金が無くなったら、また必ずここにやって来る」と信じ、ねばり強く山岳パトロール、早朝の張り込みなどを続けた。

6月18日の朝、奥多摩駅前に青梅署生活安全課が作成した「奥多摩で強盗事件が発生しているので単独登山は自粛するように」と呼びかける看板が出された。第三の犯行が起こってからでは遅い、不本意ではあるが男が捕まっていないのだから、しかたがない措置であろう。

その日の午前11時過ぎ、奥多摩交番に在所していた私のところに、A小隊長から電話連絡が入った。A小隊長はY隊員と大丹波林道周辺をパトロールしているはずだった。

「いま真名井橋のところでYとふたりで不信な男を職務質問している。男はHと名乗っており、手配の写

真と似ている、刑事課には連絡した」というものであった。

「やったぞ。すぐに向かう」と電話を切って、交番にいたO隊員、S隊員と三人でパトカーに乗り緊急走行で大丹波に向かった。

大丹波林道は、獅子口小屋跡をへて、日向沢ノ峰、蕎麦粒山とたどり一杯水避難小屋に登る登山口でもある。パトカーは大丹波に入り、15分後に真名井橋に到着した。

橋のたもとにA小隊長とY隊員、それに私服数人が立っているのが見えた。その真ん中に手錠を掛けられた小柄な男が立っていた。私は刑事に「Hに間違いはないか」と聞いたところ「間違いはない」という。そばにいたY隊員に「やったね」とねぎらいの言葉をかけた。

私は男に「Hくん」と呼びかけた。ギクッとして私の方を見た男は、写真の「H」に間違いはなかった。「ずいぶん捜したんだぞ、でもとうとう捕まえた」と言うと、Hは黙って下を向いた。

犯人は考えていたより華奢で、ひ弱そうな男であった。だからこそ単独で登っている、高齢登山者だけが狙われたのだろう。

Hはそのまま青梅署に護送されて行った。私は奥多摩交番にもどり、この日は週休で公舎にいるT救助隊長にH逮捕の報告をした。

Y隊員によると、午前中、大丹波周辺をパトカーでパトロールしていると、奥茶屋方面に歩いていく男性登山者とすれ違った。「登山にはちょっと遅すぎるな」と思ったとき「ソッ」と来た。「似ている」。すぐに近くをパトロールしているはずのA小隊長も無線で呼んで、パトカー2台であとからソッと近づき声を掛けた。

「ギョッ」と驚いたようすの男も、平静を装って名前を問われると「H」といいます。川苔山に登るところです」と本名を名乗ったという。ザックの中を見せてもらおうと、なんと中には血の付いたタオルで巻かれた鉈が1丁、包丁が2丁、金槌が1本、ナイフが1本入っていたという。もちろん食料や金はまったく無かったから、第三の犯行を企て山に入ろうとしていたことは間違いはない。Hは狂暴な性格であることに違いないが、スラスラと本名を名乗ったりしているところからみて、そう複雑な人間ではないのだろう。

諦めることなく、執拗に林道周辺のパトロールを続け、犯人が山に入るその一瞬のチャンスを見逃さず、第三の犯行を水際で食い止めることができたことは幸運であった。

そして何より私としては、山岳救助隊員による逮捕が嬉しかった。誰が捕まえても同じ事なのだろうが、それまで長時間、山岳救助隊員が山の中を駆けずりま

わっていたのに、町中で刑事課員に逮捕されたのでは山岳救助隊員の士気に影響する。「つらいときもあったが、やったかいがあった」と思えばそれでいいと思う。

「奥多摩で山賊」と事件が報道されてから、その件について山岳救助隊にも、登山者からの問い合わせが多くなった。「強盗はまだ捕まりませんか」とか「単独行が好きなのですが、山に入ってはいいませんか」などと電話や交番に立ち寄る登山者が多く、そのつど私は「まだ捕まっていません。危険ですから一人で登るのは自粛してください」と指導していた。

これでやっと奥多摩を愛し通いつめている登山者にも、「山賊は捕まりました。もう大丈夫ですよ、安心して奥多摩の山を楽しんでください」と答えることができる。

私は今朝出したばかりの「単独登山自粛」の看板を万感こめて奥多摩駅から外した。

「山賊逮捕」の情報は、すぐ奥多摩の町中に広まった、会う人ごと「よかったですね」と声をかけてくれる。私も「山岳救助隊員が捕まえたんですよ」と、少し誇らしげに話している。

それにしても逮捕されたHは、捜査員に対し「私は山が好きで、北海道と四国の山以外はほとんど登った」とうそぶいているというから、とんでもない登山者もいたものだと思える。

奥多摩の秋も深まった05年11月5日、新聞に「山賊に懲役10年判決」という記事が大きく載った。強盗傷害罪で起訴されていたHの判決公判が、11月4日東京地裁八王子支部で開かれ、裁判長は「身勝手極まりない犯行」としてHに対し懲役10年の有罪判決を言い渡したものである。裁判長はその判決理由を「一人歩きの高齢者を狙い、一方的に暴行を加える危険かつ悪質な犯行。平穩に登山を楽しんでいた被害者の精神的苦痛や、他の登山客に与えた衝撃も大きく、結果は重大」と述べたという。

Hがこの2件の犯行によって得たものは、現金2万5000円とデジタルカメラ1台でしかない。それと引き換えの懲役10年は酷のように思えるかもしれない。

しかし被害者の立場からすれば、高齢の弱者を狙った人命軽視の犯行。なんの理由もなく杖で殴られ、崖から突き落とされたり、鉈を持った男に頭を殴られて「殺される」という未曾有の恐怖。長期間にわたる入院生活を余儀なくされた精神的苦痛。善良な登山者に与えた衝撃と人間不信。登山界や社会に与えた影響の大きさなどを熟慮した上での判決なのであろう。

(完) (青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

# 奥多摩昔語り

## 奥多摩の地名(2)

川井(かわい)の語源については、「大昔は、みんな川から水を汲んでいたから川井と呼ぶようになりました。」とか、「この村は、民家を数条の沢が境界となって多摩川に合流するところから、川井と呼びました。」とか、また「大丹波川が多摩川に出合う川合いを川井と呼びました。」と、諸説あります。

地名は、もともと住民の目印ですから細かく付けられていましたが、1筆ごとに数字を付けて整理されるようになり、家号(民家に姓名の変わりに付いていたもの)として残っているものを除いて、多くは整理統合されました。川井の小字は、大昔は、78ヶ所ありましたが明治9年(1876)に現在の10ヶ所に統合されました。

「松葉(まつば)」は、松葉のように細長い平地に付けられた地名といわれています。この地域には、八雲神社が祀られていて、毎年5月5日には、獅子舞が行われます。早朝、道中笛で旧名主屋敷を出立した獅子舞の行列は、天狗の面をつけた猿田彦が先

導して神社に向かいます。神社に到着すると神事が行われる中、舞い方は、神庭で宮参りの『笹の葉』を奉納し、その後も夕刻まで賑やかに狂います。

八雲神社は、もと牛頭天王社と呼ばれていましたが、明治維新の神仏分離令により、現在の社名に改めました。牛頭天王社は、江戸時代、同敷地内の水松山万松院が支配するところでしたが、寛政4年(1792)同院廃絶後、天照山蟠龍院の支配下となりました。牛頭天王は、薬師如来の化身といわれ、祇園精舎を守護して仏敵を懼伏させ、病魔から衆生を衛(まも)る仏といわれています。

この万松院が無住の頃、いつの間にか住みついた托鉢僧が、勝手に寺の宝物、什器を売り飛ばしてしまったので、村の若者たちがこの托鉢僧を簀巻きにして、多摩川へ放り込んだといひます。いまでも、水香園の近くに「万松院淵」と呼ばれている場所があります。

【資料】 奥多摩町誌、西多摩郡村誌

## 山の花だより

### ◆ キツリフネ

この野草は、沢筋や窪地など、少し湿り気のある土地に好んで生え、近い仲間には赤紫色のツリフネソウがあります。どちらもその独特な花の姿が印象的で、比較的群落を作りやすく、沢沿いの景色づくりに一役かっています。

名前は、細い花柄で吊り下がって咲く黄色い花を船と見立てたものでしょう。

この花の姿、そして粉白色を帯びる葉や茎が、柔らかな感じを与えるためか、優しい雰囲気を漂わせます。

植物は、その分布の拡大と種の保存のため、種子の散布について、いろいろと工夫を凝らしています。この2種のツリフネソウもそのひとつで、熟した細い鞘状の実に触れると、家庭で植えられているハウセンカほどの勢いこそありませんが、パチンと弾け、中の種子を飛ばします。この野草の方言名に、ヤマハウセンカの名があるのもこのためでしょう。

### ◆ マルバダケブキ

陽当たりの良い草原に好んで生える野草で、奥多摩では雲取山の風景として馴染みのある防火帯でよく見られます。

漢字表記では丸葉岳蓐と書き、山地に生える丸い

葉のフキということですが、ツワブキを思わせるような大輪の黄色い花を咲かせます。

もともと草原の構成種ですが、ニホンジカの増加の影響で、雲取山付近に限らず、あちこちの防火帯で、これだけが生き残り大きな群落を作っています。確かに、夏には艶やかで素敵な花を咲かせますが、シカが他の植物を駆逐した結果として現れていることを知っている人には、美しさよりは、むしろ不気味ささえ感じさせます。この現状が、マルバダケブキにとって幸せなのかどうか、考えさせられる現象です。



キツリフネ

## ガイドだより ～指導標二話～

指導標は登山・ハイキングが安全に楽しく行われる様に願って設置されているものです。そこで最近の指導標を紹介したいと思います。

### 《その1》

奥多摩町内の各所で見受けられる指導標は地元産の檜材を使用しています。最近の物は文字・方向を示す記号が分かり易くなって、当初の物からすると大分改善されました。下の写真の様に3枚の標識板のうち上2枚は古い型、下は新しい型で矢印となり外国人向けにローマ字が併記されました。

【むかし道】は訪れる外国人の姿も多く、出来得れば古い型の指導標を急ぎ新しい型に付け替えていただければと願っております。



### 《その2》

六ッ石山は奥多摩の山々の中でも人気のある山です。ところがいつ頃からか山頂の標識が消え失せてしまい、石尾根から登ってきた登山者の中には山頂と気付かず通り過ぎてしまう人も時々いて、何とかならないものかと思っていました。

昨年9月、東京都多摩環境事務所の方々とは六ッ石山へ一緒する機会があって、山頂でお弁当を開いて雑談をしている中で、山頂標識が無いため山頂が判り難い旨を説明しました。山頂の地形・登山道の位置から判り易い標識を設置していただければとお願いしたところ、直ぐに理解していただきました。

11月中旬、山頂標識が設置されたことを聞いて早速見に行きました。12月8日は、ガイドの会の忘年会で、夕方からの開催なのでこの日を利用して昼間に行ってみよう、と、会員6人で見てきました。山頂は新雪に覆われ、3本柱の標識は想像以上に立派な作りで静けさの中に輝いていました。これで迷よう人も出ず事故防止の役目を果たすと大満足で忘年会に出席しました。(S.F.)

## 施設案内

### ◆ 日原鍾乳洞

奥多摩町 日原 0428-83-8491

都の天然記念物に指定され、関東でも随一のスケールを誇る日原鍾乳洞。年中摂氏11度と、夏涼しく冬暖かい洞内を、整備の行き届いた通路に沿って巡りながら、一步一步、驚異の自然美が彩る未知の世界を探検しましょう。

営業：年中無休 4月～11月末 8～17時

料金：大人600円、小人：300円

## イベント案内

奥多摩町と観光協会では、夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、官製往復葉書に参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。

(申込み多数の場合は、抽選)

- ① 8月4日(金)  
丹三郎からレンゲショウマを訪ねる  
応募締切日：7月18日まで(登山)
- ② 8月15日(火) 昆虫とカジカさがし  
応募締切日：8月3日まで(ハイキング)
- ③ 8月16日(水) 昆虫とカジカさがし  
応募締切日：8月3日まで(ハイキング)
- ④ 8月29日(火)  
大多摩トレイル 古里駅～奥多摩駅  
応募締切日：8月3日まで(ハイキング)
- ⑤ 9月27日(水)  
白丸散策と川合玉堂の足跡を訪ねる  
応募締切日：9月6日まで(ハイキング)
- ⑥ 10月5日(木) 関東ふれあいの道 棒の折山  
応募締切日：9月6日まで(登山)

### 《編集後記》

夏号をお届けいたします。奥多摩にお出かけの際のお供として、ご利用くだされば幸いです。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会